

《書評》

A.L.C. Emmerson, *Life and Death in the Roman Suburb*

Oxford: Oxford University Press, 2020, pp. xvii+282.

南雲泰輔

古代ローマ社会において、死者はいかなる存在であったか。通説によれば、ローマ人にとって死者は穢れた存在であり、接触すると悪影響が及ぶ危険があるため、死者と生者の領域は明確に区別された。したがって、死者が象徴する宗教上の汚穢を避けるべく、遺体は都市域の外部に、とりわけ帝国首都ローマではポメリウムと呼ばれる宗教境界外部に埋葬されなければならなかった。かかる説明は、広く受け入れられているといつてよい¹⁾。

しかるに、かくのごとき古代ローマ人の死にたいする態度についての一般的理解にたいして、根本的な見直しを提起する重要文献が、ここに取り上げる Allison L. C. Emmerson による『ローマ郊外における生と死』（オクスフォード大学出版局、2020年）である。著者はローマ考古学者であり、米国・デニソン大学を卒業後、同・シンシナティ大学大学院で修士号（古典考古学）および博士号（同）を取得し、現在は同・テュレーン大学古典学部准教授（本書刊行当時は助教）である。著者は古代都市を専門とし、とりわけ都市の「周縁」的な側面に関心を持ち、文字通りの都市の物理的な周縁部とそこでの活動（たとえばゴミ管理や死者の取り扱い）のみならず、女性・奴隷・サブエリートといった、古代の生活および現代の研究の双方において周縁的な扱いを受けてきた人びとに焦点を当てて研究を進めており、またスタビア門をはじめとするポンペイの発掘調査にも携わっている²⁾。

著者は、本書刊行と同じ2020年に、『ローマ研究雑誌』第110巻の巻頭論文として、内容的に深く関連する重要論文「ローマ時代の死の汚穢を再考する」を発表した³⁾。本論文において著者は、古代ローマ時代の埋葬にかんする従来の研究では、ローマ人は死者を汚穢 pollution と捉え、遺体は生者を不潔にする危険があり、共同体と神々の両方にたいして不快なものであるという考え方（著者はこれを時間・空間・ジャンルを超えて散在する史資料から引き出された「標準化された埋葬についての共時的で19世紀的な学説」と呼ぶ）が支配的であったが、都市ローマにおけるローマ人の死にたいする態度について文献史料を中心に再検討すると、古代末期以前には死の汚穢への恐怖は証拠づけられないと結論付けた。著者によれば、この「共時的学説」は、20世紀初頭の人類学者 Robert Hertz と Arnold van Gennep による理論的アプローチ、そして同じく人類学者 Mary Douglas による汚穢の研究を不適切に利用した「混合体 amalgam」であって、古代人の信仰を理解するための基礎にはなりえな

いという⁴⁾。そもそも、ローマ人が死の汚穢を恐れていたという唯一のはっきりした史料の根拠は古代末期の文法学者セルウィウスによって4世紀後半から5世紀初頭に書かれた『アエネイス注解』(Serv. *Ad. Aen.* 3.64.)のみであり、共和政末期・帝政前期にかんする限り、遺体が恐怖の対象とされ、会葬者が死者によって汚されたとする見方は何ら史料の根拠を持たないことが、極めて説得的に論じられたのである。

かかる著者の主張は本書においても共有され、議論の重要な骨格をなしているが、この画期的な構想のきっかけとなったのは、著者が博士論文執筆のためにローマ期カンパニアの墓について資料収集を行っていた折、「もしローマ人が死者から発される汚染を恐れていたならば、なぜこれほどたくさんの生者のための建物がネクロポリスのなかに現れるのだろうか」(Preface, p.vii)という素朴な疑問を抱いたことにあったという。以下、各章の概要を紹介したうえで、「郊外」および「郊外」を分析するうえで重要と考えられる環境史の視点から若干の論評を試みたい。

第1章「ローマ期イタリアにおける都市と郊外 (City and Suburb in Roman Italy)」は、第1節「定義と方法論について」、第2節「死、汚穢、ローマ都市の境界」、第3節「本書の輪郭」の三節からなる。まず著者は、本書の研究対象が、長らく過小評価・誤解されてきたローマ都市化 Roman urbanism の要素、すなわち都市そのものの外部にある都市的圏域 urban zones における生者と死者の織り成す構造であり、本書の主題はローマ期イタリア半島の郊外の性質・歴史・発展であると述べる。そもそもローマ都市とは、物理的・概念的な境界によって区切られた空間を指しているが、著者によれば、そのコントロールの鍵となるのは死だという。いわく、前5世紀の十二表法から古代末期の法律に至るまで、どの法律によっても都市内部での埋葬は禁じられ、死者は都市中心部から排除されていた。にもかかわらず、アウグストゥス期から帝政初期にかけて都市外部に郊外 suburb が発展すると、そこには墓地のみならず、ゴミ捨て場、神殿・神域、商店、宿屋、食堂、娯楽施設、貧者の掘っ立て小屋、権力者のウィッラが存在するようになった。そして著者は、この稠密に都市化した郊外という環境のなかに、生死の同居という興味深い現象を見出す。

ところで、著者によれば、郊外にかんする研究は、過去20年間に新たに登場・発展してきた領域であり、先行研究では、郊外における都市的性格と田園的性格の混淆性が強調され、墓地は郊外の田園的性格の主要構成要素として扱われてきた。他方、著者は、墓地を、イタリアの郊外について積極的な定義を形成するうえで最良の要素として捉える。墓地の存在は、郊外を都市中心から最も明瞭に区別する特徴であるが、郊外が登場し発展すると、墓地に付随して商店や工房、さらには円形闘技場のような公共建築物も共に拡大していく。すなわち、ローマ期イタリアの郊外は、先行研究のみのごとく田園的性格というよりも、墓地を伴う都市の一部として定義することができ、ローマ的生活の持続的側面としての死者・生者の関係を示すものだと著者は述べる。これによって、墓地を都市的文脈のなかに再び位置付けることを目指すと著者はいうのである。

なお、著者によれば、本書でいう「郊外」とは、帝政期の法律史料に *continentia aedificia* として言及されるものであり、都市境界に隣接し、その外部に位置付けられた都市的集塊 *urban agglomeration* を指している。本書では「郊外」を意味する語として、読みやすさを優先して英単語 *suburb* が用いられているが、これはラテン語の *continentia* と同義の扱いである。*suburb* に相当するラテン語の単語としては *suburbium* があるが、この語は通常形容詞形 *suburbanus* で用いられ、史料では都市中心外部の都市的發展を記述するためではなく、ウィッラ文化への参加によって特徴付けられるエリート的生活様式を表すために主に使われ、加えて名詞 *suburbanum* が用いられる場合もローマ近郊の贅沢な所領を意味したため、本書の意図には不適であって、意図的に使用しないと著者は断っている。

さて、都市外部の郊外はローマ世界のいたるところに存在するが、本書では歴史的枠組みを共有するイタリア半島の都市郊外が分析の中心として設定される。第2章以下は、保存状態が良好で文献史料も豊富に残るローマ、ポンペイ、オスティアをはじめとして、北はヴェローナから南はヘルドニア（現オルドーナ）まで、帝政初期に人口5万人を要したパタウィウム（現パドヴァ）のような大都市から人口2000人弱のオクリクルム（現オトリーコリ）のような小都市まで、イタリア半島における合計90以上の都市郊外についての一連のケース・スタディとなっている。

第2章「3つの郊外 (Three Suburbs)」は、第1節「ポンペイのエルコラーノ門郊外」、第2節「オスティアのマリーナ門郊外」、第3節「ローマのヴィア・デル・トリトーネ郊外」、第4節「その他の郊外：ボノニア、ファレリイ・ノウィ、他」、第5節「人口学を超えて：繁栄、平和、理想都市」、第6節「郊外の衰退と新しい理想」、第7節「結論：近隣としての郊外」の7節からなる。本章では、保存状態と史料状況が良好な3つの郊外（ポンペイのエルコラーノ門郊外、オスティアのマリーナ門郊外、ローマのヴィア・デル・トリトーネ郊外）の検討から、郊外の興亡が考察される。著者によれば、個々の郊外の発展状況は多様であるが、どの郊外もアウグストゥス期と帝政初期に登場し拡大しており、前1世紀後半と1世紀初頭における都市ブーム *urban boom* に際し、エリート層による投資が行なわれ、人口成長・富の増大・治安向上によって類似都市が増加し、新たな一体性の登場に対応したという。さらに、同時期には、「理想都市 *ideal city*」（著者の定義によれば、城壁によって囲まれているのではなく、開放的で柔軟性を備え、かつ、平和と繁栄の物理的な表現としてイタリア半島の街道沿いに位置する都市のことを指す）の概念が登場し、首都ローマから急速に普及していった。これら多くの郊外は帝政中期を通じて残存したが、3・4世紀にはさまざまな変化によって失われた。特に都市ローマの場合、3世紀後半のアウレリアヌス城壁建設による都市の再城塞化が、再定義された都市中心外部での旧郊外の放棄・衰退をもたらしたと述べられる。

以上のごとき郊外の発展を導いた多岐にわたるパターンを踏まえて、以後の各章では郊外のトポグラフィがより詳細に検討される。その際、著者は、第3章と第4章において、先行

研究で郊外のパラドックスを表す要素として捉えられてきた死者とゴミという2つの存在に焦点を当て、都市生活のシステム内部におけるこれらの役割を検討する。

第一に、死者について。第3章「郊外における死 (Death in the Suburb)」は、第1節「郊外以前：初期ローマにおける生と死」、第2節「記念碑化と (サブ) 都市化：ローマとその向こう側」、第3節「郊外の成長と墓の荒廃」、第4節「結論：墓、変化、郊外の景観」の4節からなる。本章では、ローマ期イタリアの墓地と都市の複雑な関係が跡付けられる。著者によれば、生者の定住する場から死者を排除することは、決して単線的な過程をたどったのではなく、郊外は、境界からあふれ出た都市として、墓碑の周囲に受動的に広がったのでもなかった。しかも、郊外における墓地は、郊外のさらなる発展のためのプレースホルダーですらあった。1世紀末までにイタリアの諸都市には郊外が発展し、そこでは死者の墓地が生者のための建物に沿って立地した。それゆえ著者は、郊外を定義する構造物は墓地であり、都市中心部と異なり墓地は郊外に存在したが、それは決して生死の区別のためではないと主張する。先行研究は、死の汚穢に対するローマ人の恐怖を指摘したが、ローマの歴史のどの時点でも、都市が完全に死者を排除したことはなく、多くの都市は墓地を都市域に取り込んだかたちで郊外を発展させたというのである。都市ローマにかんする証拠は、死が都市生活から決して厳密に隔離されていたわけではなかったこと、そして、郊外の登場は長年にわたる生者と死者の関係の新しい表現であったことを示しているという。本章における指摘は、著者の前掲論文の内容と対応しており、重要な主張である。

第二に、ゴミについて。第4章「中心から郊外へのゴミ管理 (Waste Management from Center to Suburb)」は、第1節「共和政期エスキリヌス丘の「プティクリ」」、第2節「再利用、再生利用、ゴミの経済：ポンペイにおけるゴミ管理」、第3節「結論：ローマからポンペイへ都市を捨てる」の3節からなる。本章では、共和政期にエスキリヌス丘にあったという悪名高い「プティクリ」が再検討される。著者は、「プティクリ」は、考古学者 Rodolfo Lanciani (1845-1929 年) の伝説的発掘に基づいて長らく信じられてきた、悪夢のごとき大規模墓地ではなく、共和政中期に公職者によって導入された都市インフラの一部たる公共汚物槽であったとして、その歴史的評価の見直しを試みている。次いで著者は、ポンペイやその他の都市でなされたゴミ管理に注目し、共和政中期以降の人口増大の結果、再利用 reuse・再生利用 recycle に供されるよりも多くのゴミが出されることになったため、汚物槽・ゴミ置き場が設置されるに至ったことを指摘する。同時に、イタリア半島の郊外で一般的にみられるゴミ置き場については、放棄された不用品の山ではなく、利用・再使用・再生利用が行なわれた経済上のアクティブな場であったと論じられる。

続く第5章と第6章では、アウグストゥス期および帝政初期のイタリア諸都市で増加した建築物について二つの大きなカテゴリー、すなわち商業施設と娯楽施設 (特に円形闘技場) について探求される。これらの施設は都市中心部に限定されない。都市とその住民は、郊外に立地した商業・娯楽施設から多くの利益を引き出していた可能性があるのである。

第一に、商業施設について。第5章「商店、工房、郊外の商業生活 (Shops, Workshops, and Suburban Commercial Life)」は、第1節「パタウィウム郊外における商店と工房」、第2節「ローマにおける墓と商業の交差点」、第3節「ボンベイにおける郊外の名声の商業化」、第4節「プテオリとローマにおける郊外の名声の非商業化」、第5節「結論：郊外の商業、都市生活」の5節からなる。本章では、郊外が商業的投資のための魅力的な場であり、都市中心部にはない利益と都市的展示 *urban display* のための機会を提供したことが論じられる。著者によれば、郊外の商業用建物は、やはりアウグストゥス期と帝政初期に登場し、墓地に沿って立地した商店と工房は、交通と活動を刺激し、訪問者の滞在を促す特権的な近隣地区に組み込まれることによって利益を得た。したがって、墓地は郊外の資源としての役割を担ったことになる。すなわち、商店と工房がまさに墓地内に位置したことで、非エリート層の店主や労働者が、都市中心部では不可能なコミュニケーションや記念碑化に参入することができたと著者はいう。

第二に、娯楽施設について。第6章「イタリアの郊外円形闘技場 (Italy's Suburban Amphitheaters)」は、第1節「ヴェローナにおける競技と共同体」、第2節「カプアとボンベイにおける円形闘技場と地域間競争」、第3節「ヘルドニアの円形闘技場と要塞の荒廃」、第4節「オクリクルムとアウグストゥス期のカンパス・マルティウス」、第5節「結論：郊外円形闘技場の利益」の5節からなる。著者によれば、円形闘技場は、土地の利用しやすさと手頃さのために郊外に立地しており、商店と工房と同様、郊外のオープン・スペースから利益を得ていたという。円形闘技場は、郊外の発展開始後に出現し、都市中心の外部に位置することで都市中心と郊外とを結びつける役割を果たし、群衆統制と公的行事へのアクセスを容易にし、さらにその立地は、墓地との相互作用をももたらした。それゆえ、円形闘技場と墓地の両者は、都市の主要なアメニティとして位置づけられるのである。

以上の各章の分析によって、前1世紀後半から後1世紀初頭における郊外発展のパターンと、続く3・4世紀の衰退という著者の所説が補強された。次の第7章では、この著者によるクロノロジーのなかで、最も重要な例外として位置付けられる神々に捧げられた空間が分析される。第7章「市壁の外の神々 (Gods Outside the Walls)」は、第1節「ミントウルナエにおける宗教と郊外発展」、第2節「ヒスパルムムの郊外聖域における結合と競争」、第3節「アウレリアヌス城壁以前以後のトランスティベリム郊外」、第4節「結論：ローマのキリスト教的郊外における継続性と変化」の4節からなる。本章では、神々に捧げられた空間について、イタリアの郊外における宗教の複雑な役割が検討される。著者は、宗教的建造物のなかには、特に初期の植民市において、早くも共和政中期に郊外に出現した例があること、そして、聖域や神殿のなかには4世紀を通じて残ったものがあることを指摘する。これらは、著者の主張する郊外発展のクロノロジーには確かに合致せず、例外的な現象となる。そのうえで、4世紀初頭のキリスト教の公的導入は、ローマの都市史において決定的瞬間であったと著者は述べる。5世紀初頭までに、郊外での伝統的宗教活動の痕跡は消滅したが、

城壁外ではキリスト教により宗教生活が継続したことが指摘される。

最後に、「エピローグ 生と死、都市と郊外：古代末期の変容 (Epilogue Life and Death, City and Suburb: The Transformations of Late Antiquity)」では、本書全体の総括として、古代末期における郊外の変化と継続性について論じられる。すなわち、5世紀初頭の戦争・攻囲・疫病・飢饉の結果、都市ローマは新しい存在として登場し、それは6世紀までに決定的に変化した。5・6世紀に、都市ローマはその歴史上初めて規模が縮小し、埋葬のための場も市壁外から市壁内へと移り変わった。ただし、著者は、5世紀末にアウレリアヌス城壁内へ墓地が大規模に移動したことは、急激な変化を示しているわけではないという。この時代に起こったのは、生死の関係の革命的な変化ではなく、都市・郊外の区別の再定義だったのであり、したがって、かかる古代末期の変化は生死に対する心情 *sentiments* の変化ではなかったというのである。そして、7世紀までに市壁内埋葬は都市ローマ以外でも一般化したのが、変化にばかり注目して継続性を無視せぬよう留意すべきだと、著者は注意を促す。古代末期の変化を生き残った郊外は、キリスト教の殉教者聖堂から成長した新しいタイプの郊外であり、これらの聖堂は半自律的な都市活動の結節点となって、8世紀までに都市ローマの殉教者の聖遺物は市壁外から市壁内の教会へと移動した。古代末期の変容は、ローマ郊外の決定的転換ではあるが、それはローマ人が死者を恐れなくなったからではない。歴史の全段階を通じて、死者は都市生活のなかに存在したのであり、ローマ諸都市の住民には、生者と死者の両方が含まれたのであるとして、著者は前掲論文および本書第3章での所説を改めて強調する。

本書は、古代ローマ社会における死と汚穢の問題、そして郊外の問題という、従前の研究では共に研究が手薄であった二つの問題系統の交点に位置付けうる著作である。死と汚穢の問題については、かつてDouglasの『汚穢と禁忌』に刺激を受け、『ローマ、汚穢、礼儀正しさ：古代から現代までの永遠の都における汚れ、病気、衛生』（ケンブリッジ大学出版局、2012年）という論文集が編まれたが、そのなかで編者M. Bradleyは、「都市ローマにおける汚れと清潔さについて個別事例にかんする研究文献を除けば、都市内部の汚穢の歴史を扱った包括的研究はない」と指摘していた⁵⁾、郊外研究については、『都市ローマ地誌事典⁶⁾』の続編である『都市ローマ地誌事典：郊外⁷⁾』の発刊・完結が、ようやく21世紀に入ってからであることを想起するならば、研究の現状理解として足りよう⁸⁾。これらの問題系統について、先行学説により時代と地域の差をいわば捨象して作り上げられた通説に対し、本書は徹底してケース・スタディを積み重ねることによって、その修正を試みた。著者は、独自の役割を持つ空間としての郊外の発展をアウグストゥス期の現象であったと繰り返し強調するとともに、従來說が当然の前提とした都市を生空間、郊外を死空間とみなす対応関係を転換し、都市と郊外を連続の相において捉え、郊外を死や穢れの場とみなす従前の否定的認識に代わって、生死の共存の場として積極的に見直そうとした。それゆえ、本書が受賞したアメリカ考古学協会ジェームズ・R・ワイズマン図書賞（2022年）の選評では、郊外に

ついでに誤解を「リセット」したと高く評価されたのであり、ローマ都市郊外研究の新動向を担う一人 P. Goodman の好意的な書評にも恵まれた⁹⁾。

もとより、従来注目されることが相対的に少なかったとはいえ、著者以前の研究者たちが郊外における生者の活動に焦点を当ててこなかったわけではない¹⁰⁾。たとえば、古代史研究者 E.J. オウエンズは「中世ヨーロッパの都市から類推して、古代ギリシア・ローマ都市の郊外を、町やその住民のあまり好ましくない要素があった地域と見るのも、同様に正しくない。ギリシア・ローマ都市の郊外は、都市自体の不可欠の側面をなしていた。¹¹⁾」と留保していた。また、一般的にも、郊外は必ずしも否定的なイメージによってのみ捉えられてきたわけではない。たとえば、地理学研究者 Y.F. トゥアンは、「帝都ローマは、広々として大きな公共の場所を、がたがたの家や狭くて汚い街路の密集地域と組み合わせた。貴族の家は平民の家屋と混在していた。悪臭を放つ都市の空気から逃げ出すために、富裕なローマ人は郊外に別荘を建てた。ローマの貴族は、海の上に高くせり出したダイニングルームと多くのプールがある豪華な別荘を愛したのである。帝国初期のローマは、むしろカリフォルニアのある種の地区のようであった。¹²⁾」と述べ、汚れた都市と清浄な郊外を対比させている。

そもそも、著者が縷説するごとく郊外において生者と死者が共存していたとしても、著者も前提するように墓地が郊外の不可欠の構成要素であったならば、ローマ人の死生観としては、都市はやはり生者の領域であり、死者が郊外に埋葬されたのは、墓地が都市内部から原則として排除されていたためと理解されるべきではないか。郊外における生者の活動を力説する著者の所説は、郊外の一面的理解の修正にかんする限り確かに説得的であるが、ポメリウムという概念的境界の存在や死者・墓地の配置それ自体を斟酌するならば、都市が城壁で圍繞されていなかった時期においてさえも、都市と郊外をあたかも何ら継ぎ目のない均質な空間の連続のごとく捉えることは困難ではないかと思料される。事実、アウグストゥス期の著作家ハリカルナッソスのディオニュシオスによる都市ローマの広がりにかんする言及 (Dion. Hal. *Ant. Rom.* 4.13) は、中世史研究者 P. Horden と古代史研究者 N. Purcell による『汚れゆく海』(ブラックウェル社、2000年)でも都市ローマとその郊外との関係の観点から注目された重要な箇所であるが¹³⁾、この史料所言にかんする Emmerson の理解は両義的であり、ある箇所では都市ローマにおける城壁の喪失と城壁を超えた都市の広がりを重視し (p.36)、別の箇所では、にもかかわらず、失われた城壁による象徴的な区切りを重視している (p.6)。もとより郊外についての明瞭な定義づけは困難な課題に属するが¹⁴⁾、かかる Emmerson の逡巡に照らせば、その重要な鍵のひとつはやはり城壁であり、それによって可視化される境界であるに相違あるまい¹⁵⁾。

ところで、環境史研究者 D. Hughes が、「ローマ帝国が経験した多くの生態系に関わる問題のほとんどはローマ人自身によって作りだされた。¹⁶⁾」と述べたごとく、Emmerson が取り上げた郊外の利活用のあり方とそれに起因する独特の景観の形成は、都市とそれを包摂する郊外の生態環境という側面にも必然的に連関するものと考えられる。都市が村落のあり

方を規定したことは夙に指摘されてきたが¹⁷⁾、では逆に、郊外における人間の活動は、都市のそれをいかに規定したのであるか。郊外は、都市の存在を前提としなければ想定することができず、その限りにおいて都市の付随的要素であるが、都市もまた都市的生活を維持すべく、郊外において展開する農村に依存せざるをえない¹⁸⁾。このことは、郊外の生態環境が都市発展の方向と程度を制約する条件となった可能性を推知せしめる。本書でなされたような都市と郊外についてのケース・スタディを広く蓄積すると同時に、両者の関係について、特に環境史の観点からの理論的な議論をも深化させることができるならば、古代地中海世界における都市と郊外の比較史研究への途が開けてくるかもしれない¹⁹⁾。

(山口大学人文学部)

注

- 1) 例えば、S. Hornblower & A. Spawforth eds., *The Oxford Classical Dictionary*, 4th ed., Oxford, 2012, s.v. 'death, attitudes to - Rome' (p.418). 長谷川岳男・樋脇博敏『古代ローマを知る事典』東京堂出版、2004年、281・284頁；L. アドキンズ／R. アドキンズ『ローマ宗教文化事典』前田耕作監修、原書房、2019年、122頁。南雲泰輔「ローマ街道沿いの墓地と感情」南川高志・井上文則編『生き方と感情の歴史学：古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』山川出版社、2021年、330-356頁も、かかる通説的理解を前提とする。
- 2) <https://liberalarts.tulane.edu/departments/classical-studies/people/allison-emmerson> 著者の携わるポンペイの発掘調査 Pompeii I.14 Project については、<https://sites.google.com/view/tulaneatpompeii>
- 3) A.L.C. Emmerson, Re-examining Roman Death Pollution, *Journal of Roman Studies* 110, 2020, pp.5-27.
- 4) それぞれの主著について邦訳は、R. エルツ『右手の優越：宗教的両極性の研究』吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美訳、ちくま学芸文庫、2001年；A. ファン・ヘネップ『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子訳、岩波文庫、2012年；M. ダグラス『汚穢と禁忌』塚本利明訳、ちくま学芸文庫、2009年。
- 5) M. Bradley ed., *Rome, Pollution and Propriety: Dirt, Disease and Hygiene in the Eternal City from Antiquity to Modernity*, Cambridge, 2012, p.xvii. 本論文集は、2007年に逝去した Mary Douglas に捧げられたものである。その後、キリスト教化以前のローマ宗教における汚穢の存在と認識を扱った専論として、J.J. Lennon, *Pollution and Religion in Ancient Rome*, Cambridge, 2014がある。
- 6) E.M. Steinby ed., *Lexicon Topographicum Urbis Romae*, 6 vols., Roma, 1993-2000.
- 7) A. La Regina ed., *Lexicon Topographicum urbis Romae. Suburbium*, 5 vols., Roma, 2001-2008.
- 8) ローマ史上の郊外にかんする研究を網羅的に挙示することはできないが、さしあたり以下を参照。N. Purcell, *Tomb and Suburb*, H. von Hesberg / P. Zanker hrsg., *Römische Gräberstraßen: Selbstfarstellung-Status-Standard*, München, 1987, pp.25-41; N. Morley, *Metropolis and Hinterland: The City of Rome and the Italian Economy, 200 B.C.-A.D. 200*, Cambridge, 1996, esp. Chap.4 'The Transformation of the Roman suburbium' (pp.83-107.); J. Patterson, *On the Margins of the City of Rome*, V. Hope & E. Marshall eds., *Death and Disease in the Ancient City*, London / New York, 2000, pp.85-103; G. Adams, *The Suburban Villas of Campania and Their Social Function*, Oxford, 2006; G. Adams, *Rome and the Social Role of Elite Villas in its Suburbs*, Oxford, 2008; G. Adams, *Living in the Suburbs of Roman Italy: Space and Social Contact*, Oxford, 2012; J. Farrell, *The Roman suburbium and the Roman Past*, C. Pieper & J. Ker eds., *Valuing the Past in the Greco-Roman World*, Leiden, 2014, pp.83-108.
- 9) <https://www.archaeological.org/grant/wiseman-book-award/> および P.J. Goodman, Review of Emmerson (2020), *American Journal of Archaeology* 125-2, 2021. (DOI: 10.3764/ajaonline1252.

- Goodman) なお、ローマ都市社会の性質と機能を理解するための手段として、ガリアにおける「郊外」(the urban periphery)を扱ったP.J. Goodmann, *The Roman City and its Periphery: From Rome to Gaul*, London, 2007は関連文献として重要である。
- 10) 注8所掲の諸文献を参照。
- 11) E.J. オーウェンズ『古代ギリシア・ローマの都市』松原國師訳、国文社、1992年(原著1991年)、202-204頁。また、P. Brown, *Through the Eye of A Needle: Wealth, the Fall of Rome, and the Making of Christianity in the West, 350-550 AD*, Princeton / Oxford, 2012, p.241. は、古代末期において郊外には富裕層のウィッラが繁榮し、「疑似都市 quasi-city」の様相を呈したことを指摘する。
- 12) Y.-F. トウアン『トポフィリア：人間と環境』小野有五・阿部一訳、ちくま学芸文庫、2008年(原著1974年)、419頁。
- 13) P. Horden & N. Purcell, *The Corrupting Sea: A Study of Mediterranean History*, Oxford, 2000, pp.110-111.
- 14) オーウェンズ(1992年)202頁; Farrell (2014) p.83.
- 15) 著者の所説は、アウレリアヌス城壁の建設とそれによる生死の峻別を強調する南雲(2021)と対立する。評者は本拙論脱稿後に本書を入手したため、拙論中で著者の所説について検討する機会を持たなかったが、著者の所説は古代都市における物理的境界としてのインフラ、特に都市ローマについてはポメリウムを可視化する物理的構築物としての城壁の意義を過少に見積もっているように感じられる。なお関連して、前掲拙論の主張に対し、内川勇海・福山佑子(書評)「南川高志・井上文則編『生き方と感情の歴史学：古代ギリシア・ローマ世界の深層を求めて』』『史林』105-3、2022年、508-514頁は、2世紀の装飾石棺の増加と3・4世紀の流行継続の位置付け如何、および、古代末期における聖人墓地・巡礼地としての城壁外墓地の意義について疑問を呈する(512頁)。装飾石棺の問題については、石棺による被葬者の所属階層(Brown(2012), p.250によれば、ローマ市出土の70点の石棺はすべて元老院議員階層に属するという)や2世紀と3・4世紀の石棺を同一次元で議論可能か否かも前提的な議論として必要となろうが、芳賀京子「古代イタリア美術」松本宣郎編『世界歴史大系イタリア史1 古代・初期中世』山川出版社、2021年、274-285頁が「遺族の心情」(285頁)に言及するように、さしあたり、外部にたいする死者の顕彰(弓削達『永遠のローマ』講談社学術文庫、1991年(初版1976年)、378頁)というよりも、生者の生活から隔離され、内在化された死者個人の名誉を表現しようとしたものとして理解しうるのはないかと考えられる。古代末期の城壁外墓地の問題については、拙論が扱ったのはいわゆるローマ墓地の変遷であり、キリスト教による古代末期の殉教者聖堂との性急な同一視には慎重を期したい。加藤磨珠枝「中世初期ローマにおける墓地の変容：フォルム・ローマヌムを中心に」北村稔(研究代表者)『戦いと弔いに関する比較文化史的研究：2007・2008年度学内提案公募型研究推進プログラム基盤的研究：立命館大学大学院文学研究科人文学専攻総合人文学専修(教員および博士課程院生)』立命館大学、2009年、87-93頁および加藤磨珠枝「5世紀の教会堂建設：皇帝の都から教皇の都へ」加藤磨珠枝編『ヨーロッパ中世美術論集1 教皇庁と美術』竹林舎、2015年、105-126頁を参照。
- 16) D. ヒューズ『世界の環境の歴史：生命共同体における人間の役割』奥田暁子・あべのぞみ訳、明石書店、2004年、148-149頁。
- 17) 藤田弘夫『都市の論理：権力はなぜ都市を必要とするか』中公新書、1993年、76頁。
- 18) J. Hughes, *Environmental Problems of the Greeks and Romans: Ecology in the Ancient Mediterranean*, 2nd ed., Baltimore, 2014, p.181. また、たとえば都市への食糧供給について、Morley (1996), esp. pp.83-107.
- 19) 西洋古代史における我が国の「郊外」関係文献として、さしあたり以下を参照。奥山広規「ローマ時代ティールの郊外墓地と社会変化」『史学研究』284、2014年、1-26頁; 上野慎也「郊外：古典期のアテーナイ」浦野聡編『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、2017年、49-105頁; 齊藤貴弘(書評)「郊外(上野慎也「郊外—古典期のアテーナイ」(浦野聡編『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版、2017、49-105)に寄せて：古代ギリシアの「聖—俗」空間についての覚え書)』『愛媛大学法文学部論集(人文学編)』48、2020年、85-96頁。